

第6回 村岡山合戦と越前平泉寺の焼亡



九頭竜川から村岡山（御立山）を望む（福井県勝山市）

戦国末期の天正元(1573)年8月、織田信長の越前侵攻により、敦賀郡刀根坂の合戦で大敗した朝倉義景^{※1}は、敦賀から府中（現越前市武生）を経て一乗谷に退いた後、一族の大野郡司朝倉景鏡（後に土橋信鏡と改名）^{※2}の勧めで、大野（現大野市）に逃れた。しかし、同地で景鏡の裏切りにあい自害して果てる。ここに越前の戦国大名朝倉氏は滅亡した。

朝倉氏の興亡を語る軍記物の『朝倉始末記』には、大野に移った義景は、早速平泉寺^{※3}の衆徒に黄金・名筆の絵巻を添えて書状を送り、変わらぬ支援を求めたとある。しかし平泉寺では、衆議の結果、義景に加担すれば、信長の攻撃をうけ全山破却の恐れありとする意見が大勢を占め、密かに義景への裏切りの協力を求めてきた景鏡に同心することになった。

一向一揆の越前占拠

朝倉氏を滅ぼした織田信長は、信長方に寝返った朝倉旧臣の前波吉継（後に桂田長俊と改名）を越前守護代に任じ、織田家臣の北庄三人衆^{※4}をその目付として支配を委ね、越前から引き上げた。

その後天正2(1574)年正月に至り、府中城の富田長繁が、越前の一方向一揆と結んで、一乗谷の桂田長俊

を攻めて自害に追い込み、翌2月には、一揆勢によって富田長繁も討たれるなど、越前一国は「一向一揆持ちの国」となった。

この背景には、大坂で信長との石山合戦を続ける本願寺が、信長方の後方を攪乱するという意図があった。織田勢を越前から追った一向一揆は、坂井郡の豊原寺（坂井市丸岡町）に本拠を置き、本願寺派遣の坊官下間頼照を総大将とする支配体制をとった。

平泉寺内の不和と一向一揆勢との対立

『平泉寺再興縁起』によれば、元龜年中（1570～1573）に平泉寺内部で、本社石垣寄進をめぐる同寺南谷の飛鳥井宝光院（兄）と波多野玉泉坊（弟）の兄弟が、巨石の見事さを競って不和となっていたとある。『朝倉始末記』には、その後天正元年に織田信長が越前に進駐すると、弟の玉泉坊が府中の織田本陣に赴き、信長から平泉寺一山の惣務^{※5}に補任される朱印状を得ようとしたとする。翌2年正月23日、それを知った兄の宝光院は、弟の分際だと憤り、平泉寺と緊張関係にあった一向宗徒を誘って玉泉坊に押寄せ、房舎を焼き妻子を殺害した。

やがて宝光院の専横が目立つようになったため、平

※1 越前国一乗谷（福井市）を本拠とし、越前国を統治した戦国大名。義景は朝倉家最後の当主。

※2 朝倉氏一門の武将。朝倉家中の権力争いから義景と不仲。後に織田氏の家臣となる。

※3 正式名は平泉寺白山神社。白山信仰の越前国側の拠点。比叡山延暦寺の末寺として栄え、明治時代の神仏分離までは仏教寺院霊応山平泉寺であった。

※4 羽柴秀吉・明智光秀・滝川一益。のちに津田元嘉・三沢秀次・木下祐久。

※5 「惣務」は平泉寺の神領・神物全体を支配する役職。

泉寺衆徒の間で批判が高まったことに危機感を抱いた宝光院は、土橋信鏡（朝倉景鏡）を参謀として寺内に迎えた。

信鏡は、一向一揆の勢力拡大により緊張関係が深まるなかで、大野郡の石徹白（現岐阜県郡上市白鳥町）経由で、信長と結ぶことを試みる。同年3月、一揆方の石徹白の御師^{※6}杉本勘解由父子等が、信長の朱印状を携え帰ってきた同地の御師桜井平右衛門の子息平四郎を、同郡六呂師で殺害する事件が起こった。そこで信鏡は、六呂師の集落を焼き払い、下手人を捕らえ成敗する。これに対し一揆方の総大将下間頼照が、美濃国郡上郡の本願寺派の拠点であった大樽安養寺に、石徹白・平泉寺間の通路を封鎖するよう求めていた。

村岡山築城と平泉寺の攻撃

『朝倉始末記』によれば、天正2年4月14日、大野郡の大野・南袋・北袋と北谷一帯の七山家の一揆衆が、村岡山（御立山）の麓の北袋・川南四ヶ村惣道場で会合した。そこで村岡山を平泉寺が押さえ、城を築くようになれば、付近の田畠が悉く同寺によって刈り取られることを心配し、先手を打って、一揆方で今夜の内に村岡山に堀柵を設け、城を構築することを決議したとある。そこで七山家の門徒らが、夜中に堀柵・乱札^{※7}・逆茂木^{※8}を構築し、堀を少し掘って立て籠もった。村岡山は、標高301メートル、周囲約3キロの小高い山である。

翌15日の早朝、これを見た平泉寺の足軽衆が、大いに驚き衆徒に告げたため、急遽同寺で会合がもたれ、至急村岡山の城砦から一揆衆を追払うべしとの意見が強まった。これに対し土橋信鏡は、急ぎ多勢で出撃すれば、その隙を突いて七山家の衆が寺内に打入り放火する恐れありとして、暫く様子見するよう慎重論を唱



平泉寺白山神社（福井県勝山市）

えた。しかし、それも多勢の意見に押切られ、宝光院・大覚院・明円坊・光浄院・三世院・宝珠坊等の衆徒と信鏡の軍勢8300人余が、村岡山城を攻撃することになる。

平泉寺の敗北と全山炎上

一方これを迎撃する村岡山城では、伊知地（伊知地）の庵室兵衛・兎角の西六郎左衛門尉・蛭牙の東孫右衛門尉・虚亡道場の左近太郎・同掃部入道々世・岸陰の弥次右衛門尉等が、一揆衆を率いて石弩・筒木を放ち、鉄砲を頻りに射ち出し奮戦した。その結果、大円坊・宝珠坊等が討死し、平泉寺勢は撃退され、一揆勢が勝利する。「勝山」の地名は、北袋の門徒が、「村岡山は勝ち山だ」と、勝ち名乗りをあげたことに由来すると伝えられる。

平泉寺勢の攻撃に先立ち、それに備える一揆衆は、この間、越前一向一揆の和田本覚寺（福井市）の許へ、平泉寺勢の襲来で難儀していることを伝え、援軍を要請していた。そこで一揆方は、越前の方々から軍兵700人余を寄集め、村岡山の後詰めとして向かわせた。だがこの一揆軍は、村岡山に赴かず、平泉寺に直接攻め入り、寺内の院坊・堂舎・仏閣に放火した。それを見て驚いた平泉寺勢が、慌てて同寺に引き返すところを、村岡山の一揆勢が城内を出て、それを追撃したため、宝光院父子をはじめ多くの衆徒が討死する。このとき信鏡も、50~60人の手勢を率い奮戦したが、「今はこれまで」と覚悟し、太刀を胸元に突き立て、馬より下に落ちて自刃した。

こうして越前の有力寺社勢力であった白山越前馬場の平泉寺六千坊は、天正2年4月15日に、越前一向一揆の攻撃を受け、全山が焼失し灰燼と化したのであった。



平泉寺と村岡山一向一揆勢の位置図

※6 御札や曆などを配り、参拝・宿泊などを世話する下級の神職。

※7 (地上や水底などに) 不揃いに打ち込んだ杭。敵の侵入を防ぐために、数多く打ち込み、縄を張り巡らせて障害物とした。

※8 戦場や防衛拠点で先端を尖らせた木の枝を外に向けて並べて地面に固定し、敵を近寄せないようにした障害物。